

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

長江 愛の詩 (長江図/Crosscurrent)

2016年/中国映画
配給: エスピーオー/115分

2018 (平成30) 年1月25日鑑賞 ビジュアルアーツ試写室

Data

監督・脚本: ヤン・チャオ
撮影監督: リー・ピンピン
出演: チン・ハオ/シン・ジーレイ
/ワン・ホンウェイ/ウー・
リーボン/チェン・ホワリン
/タン・カイ

👁️👁️ みどころ

中国三千年の歴史の中で黄河と共に長江が果たしてきた役割は大きい。しかし、①電力供給、②洪水防止、③水運改善を目的とした、世界最大規模の多目的ダムである三峡ダムの建設によって、長江はいかに変わったの・・・？

フォン・イー監督は『長江の夢』(97年)や『長江に生きる 乗愛の物語』(08年)で、ジャ・ジャンクー監督は『長江哀歌』(06年)や『四川のうた二十四城記/24CITY』(08年)でそれを表現してきたが、10年の歳月をかけて脚本を練ったヤン・チャオ監督が本作で描く「長江図」とは？その物語は超理念的かつ抽象的だから賛否両論があるだろうが、スクリーン上に映し出される映像の美しさは圧倒的！これぞ中国、これぞ長江だ。

但し、随所で提示される漢詩は難解。本作の鑑賞には中国語の勉強と中国に関するさまざまな知識が不可欠だから、視覚のお楽しみのみならずしっかりその方面のお勉強も・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■これぞ長江！唯一無二の長江クルーズ(?)を本作で！■□■

私は2000年8月の大連・瀋陽旅行をはじめとして、20回近く中国旅行をしてきたが、「長江クルーズ」には参加したことがない。アジア最大の全長6300kmを誇る長江は中国三千年の歴史の中でも冠たる地位を占め、過去さまざまな人間ドラマを生み出してきた。そしてまた、その美しさは悠久のもの。私は長い間そう思っていたが、近時は三峡ダムの建設によって、長江にも大きな変化が生じている。そのことはフォン・イー監督の『長江の夢』(97年)や『長江に生きる 乗愛の物語』(08年)、『シネマルーム22』

276頁、『シネマルーム34』322頁参照)さらに、ジャ・ジャンクー監督の『長江哀歌』(06年)、『シネマルーム15』187頁、『シネマルーム17』283頁参照)や『四川のうた(二十四城記/24CITY)』(08年)、『シネマルーム22』213頁、『シネマルーム34』264頁参照)等によって明らかだ。

「長江クルーズ」による「三峡下り」と「三国志」で有名な「白帝城」の見学は私の当面の夢だが、本作を見ればその夢の一端も……。そう思っていると、本作には、劉備玄德や関羽ではなく、張飛を祀る張飛廟が登場してくるので、それにも注目!

■□イントロダクションは?■□

公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

アジア最長の全長 6300 キロを誇る長江は、悠久の歴史、文化、大自然を育み、流域に暮らす庶民に豊かな恵みをもたらしてきた。しかし 2009 年に世界最大の三峡ダムが完成するなど、中国社会の急速な経済発展に伴い、長江も大きな変貌を遂げつつある。

ヤン・チャオ監督が 10 年の製作期間を費やして完成させた長編第 2 作『長江 愛の詩』は、極寒の長江とその周辺で 60 日間のオールロケを敢行し、息をのむほど壮大にして美しい情景を余すところなくカメラに収めた一大叙事詩である。2016 年第 66 回ベルリン国際映画祭コンペティション部門に出品されるや、世界的に注目を集める撮影監督リー・ピンピンが手がけた映像美が絶賛を博し、見事に銀熊賞(芸術貢献賞)を受賞。まさにスクリーンで観るべき圧倒的な映画体験を創出した話題作が、ついに日本公開となる。

おんぼろ貨物船、広徳号の若き船長ガオ・チュンが、今は亡き父親が遺した手書きの詩集を発見する。違法の仕事を請け負って上海から長江を遡る旅に出発したガオは、「長江図」と題されたその詩集に導かれるようにして、アン・ルーというミステリアスな女性との恋に落ちていく。彼女とガオの父親の間には、いかなる因果関係があるのか。出会いと別れを繰り返すたびにみずみずしく若返っていくアン・ルーは、はたして何者なのか。やがて三峡ダムを越え、長江の水源への航行を続けるガオが、その神秘的な旅の果てにたどり着いた真実とは……。

本作の最大の見どころは、ガオの旅を通して映し出される驚くべき絶景の数々である。下流の商業都市である上海や南京、中流の三峡ダムを経て、雄大な山々がそびえる上流へと移り変わる旅の幻想的な景色は、比類なき映画的スペクタクルを観る者に体感させる。ホウ・シャオシェン、ウォン・カーウアイといった巨匠とのコラボレーションを積み重ね、『春の雪』(05)では行定勲、『空気人形』(09)では是枝裕和、『ノルウェイの森』(10)ではトラン・アン・ユンと組んだ撮影監督リー・ピンピンの独特の感性が、遺憾なく発揮された大作となった。その得も言われぬ詩情に満ちた映像世界に魅了された観客は、あたかも長江の緩やかな流れに身を委ねるような唯一無二の没入感を味わうに違いない。

■ ■ 『苦い銭』は超現実的VS本作は超理想的・抽象的 ■ ■

前日に観た王兵（ワン・ビン）監督の『苦い銭』（16年）はドキュメンタリー映画だということもあるが、同監督らしく「苦い銭」にまつわる出稼ぎ労働者たちの超現実的な物語をリアルに描いていた。しかし、本作の物語はそれとは真逆で、超理想的かつ抽象的！

本作はオンボロ貨物船の船長ガオ・チュン（チン・ハオ）が1冊の詩集を見つけたところから始まるが、その詩集に導かれるように長江を遡っていくという物語は一体どこから生まれてきたの？また、夫がいたはずの女性アン・ルー（シン・ジーレイ）とガオ・チュンがなぜ恋仲になるの？そもそも、アンは生きているの？それとも死んでしまっているの？少し真面目に考えれば、本作のストーリーはわけのわからないことだらけだ。ヤン・チャオ監督はそんな本作の脚本作りになぜ10年もかけ、7稿も重ねたの・・・？

主演を演じるチン・ハオは、ロウ・イェ監督の『スプリングフィーバー』（09年）（『シネマルーム26』73頁、『シネマルーム34』288頁参照）、『二重生活』（12年）（『シネマルーム35』152頁参照）、『ブラインド・マッサージ』（14年）で強烈な印象を残す演技を見せていたが、ヤン・チャオ監督の脚本、演出による本作での超理想的・抽象的な演技は如何に・・・？他方、テレビドラマの出演が多いらしいアン役を演じたシン・ジーレイも、セックスシーンがあるといってもそれはほんの2、3秒だけで、抽象的な演技だらけだから大変。どちらかというとはそんな理想的抽象的な物語は苦手だが、さてあなたは・・・？

■ ■ なぜ1989年の詩集が？その漢詩の勉強が不可欠！ ■ ■

本作のストーリーの軸は、「ガオとアンの間で繰り広げられる、現実と虚構、そして現在と過去が交錯する深遠なラブストーリー」だそうだが、前述の通りそれは超理想的、超抽象的でわかりにくい。

他方、本作ではガオの父親が残したという一冊の詩集『長江図』に基づき、ガオが船長を引き継いだ広徳号が停泊する要所要所で漢詩が歌われる。中国語の素養のない人にはこれはなかなかわからないだろうが、中国語の勉強がかなり進んでいる私には少し理解能力がある。ちなみに、現在日経新聞では、林真理子の連載小説『愉悦にて』が続いているが、1月26日の連載142回目現在、そこでは主人公の田口が交際を始めた中国人女性・花琳（ファリン）からメールで送られてくる漢詩を巡るハラ「探り合い」が微妙な展開を見せている。それはともかく、本作に登場するこれらの「長江図」を巡るさまざまな漢詩は、悠久の流れ・長江をより深く理解するのに役立つこと間違いなしだから、本作の鑑賞についてはそれをしっかり勉強する必要がある。

それにしても、この詩集は1989年つまり天安門事件の時代に書かれたそうだから、そこにも深い意味があるはず。したがって、そのことも併せてしっかり考えたい。

■□■三峡ダム建設の目的は？この英題はなぜ？■□■

本作では広徳号が「三峡ダム」を遡るについて、いわば「船のエレベーター」ともいべき施設に乗るシークエンスが登場する。これは私が住んでる大阪市都島区を流れる淀川にある「毛馬の閘門」と同じシステムだが、その巨大さは10倍、100倍のもの。三峡ダム建設の目的は、①電力供給、②洪水防止、③水運改善の3つ。この巨大なダム湖の誕生によって水位が上昇したため、重慶まで1万トン級の大型船が航行可能となったわけだ。

本作のそんな興味深いシークエンスにも注目だが、本作全編を通しては、広徳号が長江を下流の上海から上流に遡って進んでいくことに注目したい。本作の中国タイトルは『長江図』だが、英題は『Crosscurrent』で、これは「逆流」を意味している。30年前の1989年に父親によって書かれた詩集『長江図』に導かれるようにガオが広徳号に乗って長江を遡っていくのは、父親を含めた過去への回帰であることに間違いない。しかし、超理想的かつ抽象的な本作では、同時にそれは未来に向かっての旅に通じているのだろう。



『長江 愛の詩 (長江図/Crosscurrent)』
画・王雅 (2018. 5)

本作のプレスシートには、かなり長いヤン・チャオ監督の「Director's Statement」がある他、川口敦子氏（映画評論家）の「一筋縄ではいかない映画はシンプルな恋物語を捨て、歴史と魂の自由をみつめる」と、杉野元子氏（慶応義塾大学教授）の「どうしようもない哀しみ」という、少し難しいが読み応えのあるコメントがあるので、これもぜひ勉強したい。

■□■結末はあっと驚くほど現実的！■□■

本作の「ストーリー」は広徳号が長江の最上流に至った時点で、「あっと驚く展開」を見せる。本作はガオとアンとの超理想的、抽象的なラブストーリーであると同時に、ガオが広徳号を操って長江を遡ったのは、「ある男」（ルオ社長）から「あるもの」（希少種の魚らしき生き物）を長江のはるか上流にある四川省宜賓まで運ぶという「違法な仕事」を請け負ったためだ。それなのに、ガオは物語の中でアンとのラブストーリーにかなりうつつをぬかしていたから、その仕事は達成できたの？そんな心配をしていると、物語のラストには「あっと驚く」ほど現実的な結末が待ち受けているので、それにも注目！

もっとも、この時点ですでにアンは死亡しているはずだし、ガオもその時点では何のために違法な仕事をしているのか自体もわからなくなってしまっていたはずだから、彼もすんなり自分の死を受け入れることができたのでは・・・？それはともかく、ガオの死亡という結末だけはあっと驚く現実だから、そこから本作の理念性、抽象的な内容をあらためて しっかり考えたい。

■□■ドキュメンタリーの「長江」も観たいものだが・・・■□■

本作は、そんな風に「物語」がラストを迎えると、100年前200年前の長江とそこで暮らす人々の姿がドキュメンタリー風に示されるので、それにも注目！中国には、西欧列強の進出に苦しみ、アヘン戦争によってボロボロにされた時代があった。また、中国には『北京の55日』（63年）や『砲艦サンパブロ』（66年）で描かれたような苦しい時代もあった。鄧小平による改革開放政策が始まり、中国が経済的に成長したのは1980年代。それ以降長江は大きく変わっていったが、それ以前の変化はそれほど大きくないはずだし、長江に根差した各都市の人々の生活もそれほど大きな変化はないはずだ。したがって、本作ラストにみる長江のドキュメンタリー風映像はどれも興味のあるものばかりだ。改革開放政策以前の中国で、長江を巡る映像がカメラに収められているものは多くないのかもしれないが、本作ラストの映像を観た私は是非それらを見たくなった。

前述したフォン・イー監督やジャ・ジャンクー監督は、三峡ダム建設を巡っての長江やそこで過ごす人々の様々な姿をカメラに収めたが、それ以前はどうだったのだろうか。そして、ワン・ビン監督なら長江を巡るドキュメンタリー映画をどのように作るのだろうか？もちろん、ドラマ映画では素材が命だから、今更100年前200年前の長江の姿をカメラで撮ることはできないが、過去の映像や写真をフルに集めればワン・ビン監督特有のドキュメンタリータッチの『長江図』を作ることもできるのでは？本作のような超理想的、抽象的な『長江図』もいいかもしれないが、ぜひワン・ビン監督流のリアルで現実的な『長江図』も観てみたいものだ。

2018（平成30年）年2月5日記